



「アイアン・ホース」
(1924年 / アメリカ / 118分 / モノクロ)
IVCF-5080 価格 3,675円 (税込)
発売元: 株式会社 アイ・ヴィー・シー

今回は、鉄道建設に関する映画を紹介する。それは、一九二四年に20世紀フォックスが社運を賭けて作ったと言われる「アイアン・ホース」である。この映画は、当時若手二十九歳のジョン・フォードが監督し、フォードの名を世に広めたサイレント西部劇の佳作である。一九二三年にサイレント映画の傑作「幌馬車」が、一九二五年には同じくチャップリンの「黄金狂時代」が公開されるなど、「アイアン・ホース」が世に出た頃は、サイレント映画の全盛期であった。フィルムの状態だけからすると確かに古色蒼然としているが、サイレント映画の最盛期だけに、音が無い分映像に工夫があり、これらの映画は今見ても十分楽しめる。題名の「アイアン・ホース」は、インディアンがアメリカ大陸横断鉄道建設の際、蒸気機関車を見て付けた名前由来している。大陸横断鉄道は、リンカーンの決定により、南北戦争中の一八六三年から建設が始まり、東からはユニオンパシフィック鉄道が、西からはセントラルパシフィック鉄道がそれぞれ建設を開始し、一八六九年五月についてユタ準州(当時)で両社の建設した線路が連結するのであるが、

鉄道と映画 — 26

サイレント西部劇の名作。
アメリカ大陸横断鉄道建設を描く。

THE IRON HORSE

「アイアン・ホース」

この映画はその間の物語である。ストーリーは、建設を巡る陰謀、インディアンへの襲撃、建設労働者とのトラブル等、さまざまな困難に直面してきたユニオンパシフィック側の建設の模様を中心に、親の代からこの鉄道の建設を夢見てきた青年とその幼なじみとの恋愛をからめ展開する。映画の導入部、横断鉄道を夢見る技師とその幼い息子の様子から、鉄道建設ルートのファイジビリティ調査に旅立ったこの親子を襲う試練までの間は、なかなか快調なテンポで撮られており、思わず引き込まれてしまうのは、若いとはいえ流石にジョン・フォードであると思う。その後の展開で映し出される広大でワイルドな西部の風景や人力中心の建設現場の様子も良く撮れているが、フォードの円熟期に作られた「荒野の決闘」などのような詩情豊かな映画シーンはまだ見られないし、インディアンへの襲撃と救出シーンも良くできているものの、やはり「幌馬車」の迫力とは大分異なる。しかし、主人公の周辺を固める脇役たち(例によってアイルランド人たち)は、この頃から後年の騎兵隊シリーズの兵隊たちのようなユーモラスな味を既に出しており、ジョン・フォード西部劇の原型を見るようであり、大変興味深い。

この映画が撮られた当時は、大陸横断鉄道建設から五十年程度しか経っていない。言ってみれば現在の時点で東海道新幹線の建設にまつわる映画を作るようなものであるから、多分建設時を知る人間もまだかなり存在していただろうし、風景も当時を偲ばせるところがあつたと考えられ、それらが鉄道建設についての真実味のある映像を作るのに寄与したであろうことを窺わせる。例えば、両社の線路が連結するシーンでは、一八六九年の実際の開通セレモニーに使われた機関車、ユニオンパシフィック社の一一六号、セントラルパシフィック社のジュピター号が使われている。

と

ところで大陸横断鉄道開設から約一世紀半経った今年、リンカーン

崇拝者のオバマ大統領が高速鉄道網建設の重要性を指摘、十一路線延

べ一万三〇〇〇キロの高速鉄道建設を提唱し、今年の予算で八十億ド

ルを計上した。ことによるとアメリカも高速道路と航空一辺倒の長距

離旅客輸送から再び鉄道を重視した交通システムに変えるのかもしれない。

その辺のことに想いを馳せながら、映画を見ると二層興味が増す

と思う。



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

この映画はその間の物語である。

ストーリーは、建設を巡る陰謀、インディアンへの襲撃、建設労働者

とのトラブル等、さまざまな困難に直面してきたユニオンパシフィック

側の建設の模様を中心に、親の代からこの鉄道の建設を夢見てきた青

年とその幼なじみとの恋愛をからめ展開する。映画の導入部、横断鉄

道を夢見る技師とその幼い息子の様子から、鉄道建設ルートのファイ

ジビリティ調査に旅立ったこの親子を襲う試練までの間は、なかなか

快調なテンポで撮られており、思わず引き込まれてしまうのは、若い

とはいえ流石にジョン・フォードであると思う。その後の展開で映し出

される広大でワイルドな西部の風景や人力中心の建設現場の様子も良

く撮れているが、フォードの円熟期に作られた「荒野の決闘」などの

ような詩情豊かな映画シーンはまだ見られないし、インディアンへの襲

撃と救出シーンも良くできているものの、やはり「幌馬車」の迫力とは

大分異なる。しかし、主人公の周辺を固める脇役たち(例によって

アイルランド人たち)は、この頃から後年の騎兵隊シリーズの兵隊た

ちのようなユーモラスな味を既に出しており、ジョン・フォード西部劇

の原型を見るようであり、大変興味深い。

この映画が撮られた当時は、大陸横断鉄道建設から五十年程度しか

経っていない。言ってみれば現在の時点で東海道新幹線の建設にまつわ

る映画を作るようなものであるから、多分建設時を知る人間もまだか

なり存在していただろうし、風景も当時を偲ばせるところがあつたと

考えられ、それらが鉄道建設についての真実味のある映像を作るのに

寄与したであろうことを窺わせる。例えば、両社の線路が連結するシー

ンでは、一八六九年の実際の開通セレモニーに使われた機関車、ユニオ

ンパシフィック社の一一六号、セントラルパシフィック社のジュピター号

が使われている。

と

ところで大陸横断鉄道開設から約一世紀半経った今年、リンカーン

崇拝者のオバマ大統領が高速鉄道網建設の重要性を指摘、十一路線延

べ一万三〇〇〇キロの高速鉄道建設を提唱し、今年の予算で八十億ド

ルを計上した。ことによるとアメリカも高速道路と航空一辺倒の長距

離旅客輸送から再び鉄道を重視した交通システムに変えるのかもしれない。

その辺のことに想いを馳せながら、映画を見ると二層興味が増す

と思う。